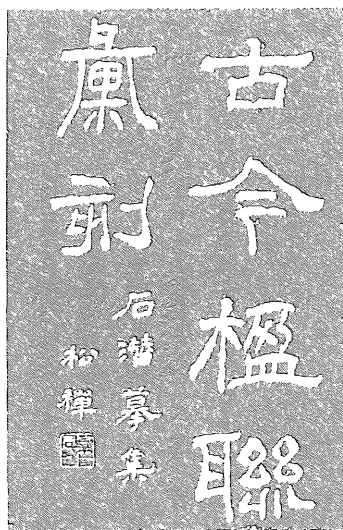


728.22  
ka57

# 近代中国の書文化

菅野智明 著

筑波大学出版会



寄贈図書

河 古 圖 二  
初 跋 譚 兼



09017601

## は し が き — 現代の書を再考するもう一つの鍵 —

手書きの文字には顔があり、パーソナリティーが備わる。手で書かれた言葉は、書き手の分身のように血肉化され、固有のメッセージを発する。「肉筆」とはいい得て妙だ。生活の隅々まで活字や電子文字が浸透している現在、肉筆のメッセージが担う役割は、さらに重みを増している。

のみならず肉筆は、その個に根差した字姿によって、審美の対象としても自律する。発せられた言葉には美観が伴う。その美に着目する時、言葉は書として再生する。

書が文字に開花する限り、それは識字を前提としなければならない。識字には教育が要る。かつて識字は手習いと表裏の関係にあった。さらに書は、範とすべき手本を要件とする。絵画が風景や静物を手本とするのとは異なり、書は書からしか生まれない。これに伴い、範となる名筆の複製・出版も一般化してゆく。その一方で、複製によらず、オリジナルを希求するコレクターも現れた。彼らは、鑑識眼を培い、名筆の選別と体系化に貢献した。

こうしてみると、書が成り立つ基盤は、教育や出版、あるいは鑑別や収蔵、こうした「文化」と呼ぶべき種々の社会的精神活動様式に見出される。諸々の文化事象の絡み合いを土壌に書は開花するのである。

従来、書の歴史は、優れた書人と、その書を中心にもとかれてきた。確かに書が審美を核心とする以上、その歴史は、優品と名家の歩みを本流とするのであり、折々の書美を語らずして、書の史的回顧は成立しない。

しかし、その書美も、それを取り巻く諸文化に根差せばこそである。本書は、上述のような書を取り巻く諸文化を「書文化」と称し、その往時のありさまを探つてゆこうと思う。名家と名筆の歩みに寄り添う、もう一つの

書の歴史である。

ここにおいて本書は、近代中国のそれに注目する。漢字が生んだ書は、周辺のいわゆる「漢字文化圏」の国々に多大な影響を与えつつ、東アジアを特色付ける一大芸術ジャンルとして確立した。その独自性は、近代を経て現代に至っても、少しも色褪せることはない。近代以降、確かに西洋の文化は激流のように押し寄せてきたが、漢字という固有の形態・体系に宿る書の本質が、欧化によつて直接的な変革を強いられることはなかった。

だが、そうした書を取り巻く諸文化は、西洋あるいは欧化した日本の諸文化の影響を受け、過去に類例のない新たな局面を迎えることになる。公教育制度の確立、美術団体の社会的組織、写真印刷技術の発達、考古的な発掘による文字資料の新獲、このような諸文化の激変は、主として制度や技術の側面で顕著に起こった。ただそれは、上述のように前代から本質を変えない書芸術と渾然一体となつて、新しい書文化を築くことになる。伝統と革新の共存——それは、時代を超えた永遠のテーマといえるが、近代は過去のどの時代にもまして、この問題に直面しなければならなかった。それに対する近代なりの答えに、私たちは刮目せずにはいられない。

基盤としての諸文化が激変しつつも、それに淘汰されず、中国的伝統を固持し続ける書芸術のありさまは、昨今取り沙汰される「グローカリゼーション」の典型といつても過言ではなからう。諸文化のグローバル化を柔軟に受け入れながら、土着の自民族固有文化（芸術）を埋没させず、新たな文化に調和させようとする姿勢、もとよりそれは、現代の書のグローカリゼーションにも通じている。近代の書文化の回顧は、現代の書文化を見直す直接の鍵であり、現在進行形の問題でもある。

このような視点に立ちつつ、本書では、各論的に以下の書文化を取り上げることにした。

一、書を含む美術団体の社会的組織。以前にみられた書派や書壇と異なり、清末になると、社約を掲げるなど明確な目的意識のもとに結成された団体が、急激に勃興する。ここでは清末に杭州で設立された西泠印社せいれいんしゃに焦点を当て、その設立経緯や美術団体における位置を探る。

二、書の出版事業。近代における写真印刷技術の導入は、ビジュアル情報を要とする書や美術関連の出版に、画期的な変革をもたらした。そうした出版社の中で、書の出版については最大手の声もある有正書局に注目し、そこにおける書の出版状況を、実際の出版物を手がかりに多角的に検討する。

三、学校教育での書の科目化。中華民国期、新しい学制に基づき設立された学校、とりわけ美術専門学校のような高等教育機関において、書はどう扱われたのか。美専の先駆とされる上海美術専門学校で、顧燮光しやうこうが施した書の講義録が今に伝わる。それをもとに、往時の書教育の実相に迫る。

四、書の収蔵活動。名筆の形成は、作り手側によるのみならず、収蔵家を中心とした受容者側に委ねられる部分も大きい。近代は、古代の文字資料が相次いで発掘され、それに基づき古代史の再考が急速に進んだ時代である。こうした新出土文字資料を積極的に収集した羅振玉の活動について、上述の顧燮光のサポートも視野に、注目する。

五、書の目録化・データベース化。個人単位の収蔵活動もさることながら、それを超えて、伝世の書作品や文字資料の網羅的な確認作業も、書文化の基盤として不可欠である。ここでは、清朝後半に興隆する金石学の陰に隠れてしまった「法帖」にスポットを当て、そのデータベース化が、実は金石学と深く結び付く点を明らかにする。

六、最後に上述した出版や収蔵、そしてデータベースなどが、複合的に関わる文化事象の一つとして、「尺牘集」の影印刊行を取り上げる。上記諸文化は、相互に無縁であるわけではなく、有機的に絡み合う中で、豊穡な書文化を作り上げている。清末に活発化した尺牘集の刊行は、それをうかがう典型的な事例である。

以上のように、各テーマは特定の個別事例に焦点を絞り、それぞれの書文化を概説的になぞることはあえて避けた。一つの事例を掘り下げること、書文化相互の関連や、近代固有の特質が、より鮮明に見通せると判断したためである。また、上記の各文化も主要なものをおもな遍く収めたわけではなく、自ずと偏向もあるかと思われる。

大方の教示を乞う次第である。

### 凡例

- 一、本書各章における古漢文の引用は、使用フォントの範囲内で旧字体表記への統一を期した。原文が白文の場合、引用者において標点を施している。
- 一、引用に際しては、原文の割注を（ ）で表記し、引用に中略部分がある場合は、「…」で表記している。誤字と認められるものや判読不能のものには「ママ」と附した。
- 一、古漢文の引用では、その直後に現代日本語訳を小字で添えた。
- 一、引用や固有名詞を除き、年月日や書籍の巻数をはじめとする「序数」の表記では、「十」や「百」などの単位語を用いなかった。